

## I ターンから漁業経営確立への取り組み

—漁業の海に飛び込んだ10年の歩み—

京都府漁業協同組合 舞鶴支所  
高田 亮

### 1. 地域の概要

舞鶴市は、京都府北部に位置し、静穏な舞鶴湾、日本海の若狭湾に面する人口約8万4,000人の市であるが、私の住んでいる吉田地区は人口が100人にも満たない小さな集落である(図1)。

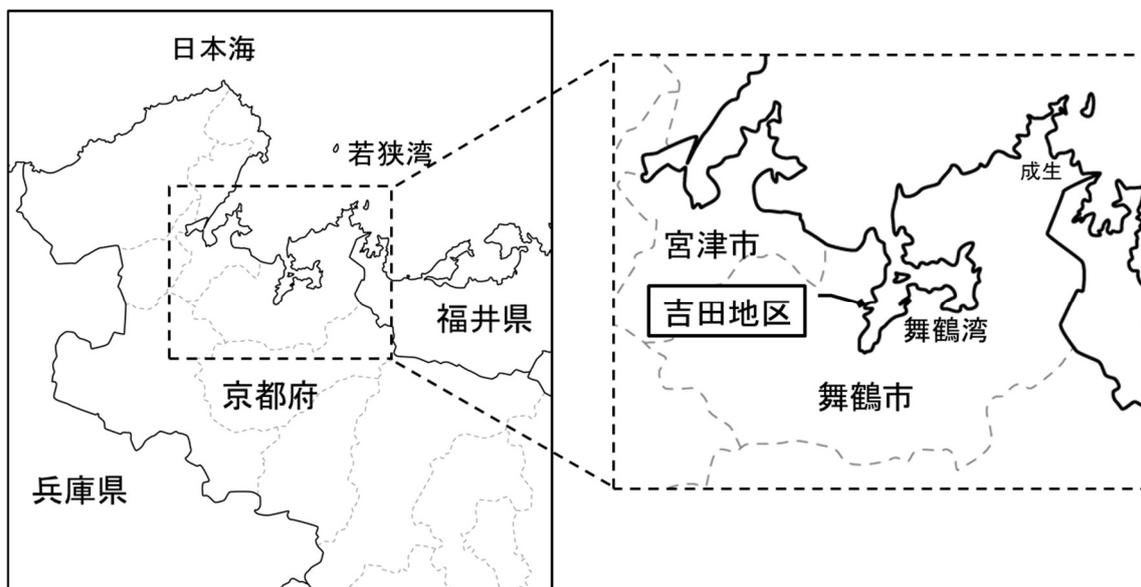


図1 位置図

### 2. 漁業の概要

舞鶴市には、漁協組合員471人(正組合員数243人、准組合員数228人：令和5年3月末現在)が居住し、その地形的な利を生かして、舞鶴湾でのトリガイやマナマコ(アオ、クロ)を漁獲する桁引き網漁業、潜水や水視でアワビ、サザエ、イワガキ、マガキ、マナマコ、アカナマコなどを漁獲する採介藻漁業、トリガイ、マガキ、イワガキ、アサリなどの二枚貝養殖業や刺網漁業の他、若狭湾沿岸で大小の定置網漁業や刺網、釣・延縄漁業、日本海でズワイガニやカレイ類を漁獲する底引き網漁業が営まれている。令和4年の年間水揚げ量は約2,900トン、年間水揚げ額は約14億2,000万円であり、府全体の水揚げ量の25%、水揚げ額の36%を占めている。また、舞鶴湾の湾奥には産地卸売市場があり、令和4年実績で、府内漁獲物の水揚げ量の約90%、水揚げ額の約76%の水産物が集荷されるとともに、府外のまき網や定置網などの漁獲物も取り扱われている。

### 3. 研究・実践活動の取り組み課題選定の動機

私は、京都府宇治市で生まれ、高校卒業後は市内の会社に就職して漁業とは全く関係ない仕事に従事してきた。ただし、京都府舞鶴市の吉田地区に父方の祖父がおり、祖父が地先で営んでいたマガキ養殖を帰省する度に手伝ったり、釣りをしたりしてすごしていた。そんな私が、平成23年の25歳の時に、一念発起し漁業を生涯の仕事とするため祖父のもとに飛び込んだのは、過去の経験が頭の片隅にあったから、そして基本的に海が好きであったからである。その後は、祖父のマガキ養殖などを手伝いながら、平成28年に祖父が亡くなった時に継承ではなく新規で漁協の正組合員となり、30歳で本格的に漁業経営を開始することとなった。

### 4. 研究・実践活動の状況および成果

#### (1) マガキ養殖の技術取得

祖父は舞鶴湾でも特に静穏な吉田地区の地先(図2)にマガキ養殖用の筏を1台所有しており、基本的な作業については祖父から指導を受けた。ただし、筏の作り方やマガキ稚貝の食害生物であるヒラムシ対策などの細かいことについては、吉田地区や他地区のカキ養殖の方々に技術指導を受けながら習得した。当初1台であった筏を現在は2台まで増やして、1月から3月末ごろまで出荷している。出荷については、むき身のマガキの一部を京都府漁業協同組合(以下、京都府漁協)



図2 吉田地区のカキ養殖筏

に出荷している他は、殻付きやむき身のマガキをロコミで個人販売している。ロコミでの販売については、コロナ禍の影響もあり販売量は年により異なるが、「おいしい」という声を直接聞くことができ、努力しただけの対価が得られることのうれしさとともに、やり甲斐を感じている。

#### (2) イワガキ養殖の技術確立

マガキ養殖の技術習得と共に販売も軌道に乗り始めたが、それだけでは収入が厳しく、平成28年の30歳の時に安定的な収益が見込める養殖としてイワガキの種を導入し、養殖を開始した。養殖を開始するにあたり、マガキより長期間の養殖が必要であることから、吉田地区でイワガキを養殖していた方に種の付着した採苗器の初期育成や挟み込み方から指導を受けた。舞鶴湾で養殖されるイワガキは通常3年間で出荷されるが、種苗が小さい段階での密度調整や餌が競合するムラサキイガイなどの付着物の定期的な除去を実施した結果、令和2年の34歳の時に身入り、形、大きさなどブランド品である「丹後の海育成岩がき」として自信をもって出荷できるものが一定数生産できる4年間の出荷サイクルを確立することができた。現在は6台の筏を所有しており、4月中旬から8月末ごろまで全数

を「丹後の海育成岩がき」として京都府漁協に出荷しており、令和2年の約300kgから令和3年以降は急増し、その後は安定して約1,200kgから1,400kgを出荷している（図3）。

出荷にあたっては、塊となって成長しているイワガキを丁寧に分離し、付着物を取り除いた上でサイズ分けする必要がある。出荷前の季節の風物詩として、毎年その様子的一端がテレビや新聞、舞鶴市の広報に取り上げられるが、一昨年ははからずも私が取材を受けることとなり、舞鶴湾の「丹後の海育成岩がき」を代表する立場での取材に、緊張しながらの作業となった（図4）。

なお、イワガキの塊を分離した際に出てくる小型サイズのイワガキについては、成長が良くなるよう耳吊り方式で再垂下して、翌年以降に「丹後の海育成岩がき」として出荷している。

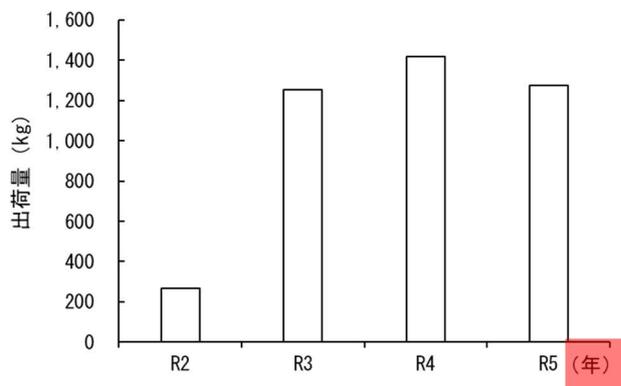


図3 丹後の海育成岩がきの出荷量の推移

図4 丹後の海育成岩がきの取材対応

### （3）大型定置網への就業

令和2年にイワガキ養殖の出荷サイクルが確立し、マガキとイワガキを合わせたカキ養殖に一応の目途が立った。しかし、この時期はコロナ禍の影響で売れ行きが不透明であったことから、他に一定の収入が得られる方法がないかと模索していた。そんな時に、たまたまハローワークを訪れると、同じ舞鶴市の成生地区（図1）で大型定置網を営んでいる有限会社成生水産の従業員の募集を見つけた。「これだ！」と思い面接に臨んだところ無事就業することとなった。成生地区は



図5 大型定置網の荷捌きの様子

同じ舞鶴市内といっても車で片道50分の通勤となるが、これにより一定の収入を確保することができるようになった。現在は、就業3年目であり、諸先輩方の指導のもとまだまだ勉強の毎日である（図5）。

### （4）その他の漁業への挑戦

カキ養殖の他には、その他の漁業として令和元年以降にカゴ漁業、タコつぼ、刺網漁業、ナマコ桁網漁業に挑戦している。

カゴ漁業ではバイを漁獲しており、コノシロやカタクチイワシを餌として、4月から9月末まで操業している（図6）。これは、バイの漁場が舞鶴湾外であり、10月以降は海が荒れる日が多くなり漁に出られなくなること、水温が下がるとバイの動きが鈍ることから9月末までの操業となっている。

タコつぼではマダコを漁獲しており、4月から11月まで操業し、活魚として出荷している。主な漁場は吉田地区の地先であり、一部はカキ筏にも設置している。複数個のタコつぼを引き上げるのは一苦勞であるが、マダコが入っているときには重さが違うこと、タコつぼから排水される水が少ないことで容易に判別できること、また、再設置に餌が必要ないことから作業時間はそれほど要しない（図7）。

刺網漁業に使用する網は、高齢で操業をやめられる方から譲り受けたものである。舞鶴湾内で8月からは青ばさみ（タイワンガザミ）、そしてもお（メバル、カサゴ類）やキジハタなど、12月からは舞鶴湾中央部でタチウオを狙って操業している（図8）。先に述べた通り、通常は大型定置網の作業があるので、出勤前に漁場に網を設置し、帰宅後に網揚げを実施している。

なお、これらの漁業の漁獲物については通常は定置網の出勤前に舞鶴卸売市場に出荷しているが、活魚の漁獲物があった場合には、当日に船を走らせて競りに間に合うように直接市場まで持ち込むこともあり、市場が地元にあるメリットを感じている。また、小型の漁獲物については大きくなることを願って海に帰すこととしている。



図6 バイカゴ



図7 タコつぼ操業



図8 刺網操業

また、マナマコを漁獲するナマコ桁網漁業（1桁網引き）は1月から3月に実施している。きっかけは、近隣地区の中古の船を購入した際に同時にナマコの桁も譲り受けたことであり、操業技術は先輩漁師に指導を受けている。ただし、舞鶴湾でのナマコの操業は7時から14時までとなっていることから、大型定置網の操業がある日は2時間も操業できれば良い方である。桁網の操業技術は一朝一夕で身につくものではないが、海底の地形を読みながら桁を操った結果、思った通りに多くのナマコが網に入っていたときにはやりがいを感じている。近年、マナマ

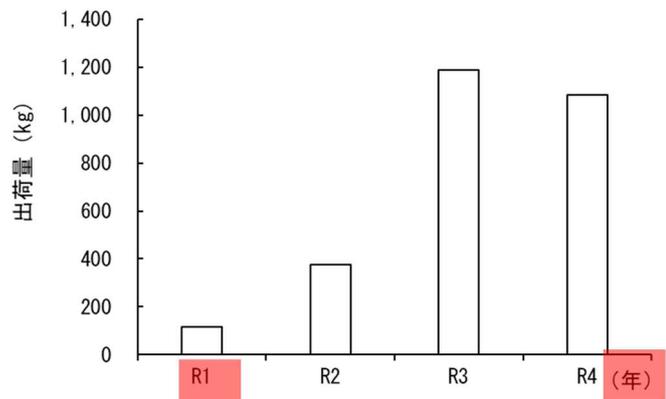


図9 その他の漁業の出荷量の推移

コは単価が向上していることから頑張って操業したいが、舞鶴湾の操業ルールを厳守しながら持続的に漁獲していきたいと考えている。

これらの漁業の総出荷量は、令和元年に約 100kg であったものが、令和 3 年から 4 年にかけて約 1,000 から 1,200kg まで増加している（図 9）。なお、令和 3 年より出荷量が急増したのはマナマコの出荷量が増加したことが大きいためである。

#### （5）年間の操業スケジュール

私の年間の操業スケジュールは、1月から3月はマガキ出荷とナマコ桁網、4月から9月はイワガキ出荷とバイカゴ、8月から12月が刺網、4月から11月がタコつぼ、1月から12月が大型定置網となり、年間を通して舞鶴の海の恩恵を受けて操業している（表 1）。

表 1 年間の操業スケジュール

種類/月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
マガキ出荷	←→											
イワガキ出荷				←→								
バイカゴ				←→								
タコつぼ				←→								
刺網								←→				
ナマコ桁網	←→											
大型定置網	←→											

#### （6）グループでの養殖カキPRの取り組み

地元のカキのおいしさを多くの人に味わっていただきたいと考え、令和 4 年 7 月に隣接する青井地区の若手を含むカキ養殖漁業者 8 人で「青井育成会」を結成し、会長として主体的に取り組みを進めているところである。まず、手始めに自分たちが生産したマガキを舞鶴市のふるさと納税の返礼品として取り扱ってもらおうべく舞鶴市に積極的に売り込みをした結果、令和 5 年 2 月から返礼品としての取り扱いが開始された。そして、令和 5 年 3 月からは、青井地区の共同作業所の一部を改良して、土曜市としてマガキの販売を開始した（図 10）。6 月からは土日を週末市の開催日と位置付け、イワガキを販売するとともに、7 月にはイワガキを自ら焼いて食べてもらえる食事処を開店した。いずれも短期間での取り組みであったが、地元メディアや SNS での紹介もあり、会員だけでは手が足りない日もあった。また、リピーターが多かったことも特徴であり、私たちが目標としていた「おいしいカキを知ってもらおう」という目標は一定程度達成できたと思われる。さらに、一般の方にイワガキを家庭で手軽に味わってもらうために、地元の企業と協同でイワガキの加工品である「岩がき丼」の素を開発し、現在、サンプルを各所に配布して改良点を含め評価を受けているところである。

## 5. 波及効果

隣接地区で、平成30年に2人の30代の同世代の若手がカキ養殖に着業したことも、少なからず私自身の頑張りが影響したのではないかと感じており、これらの方々とは今後も切磋琢磨しながらカキ養殖を持続的に継続し、地域の活性化の一助となりたいと考えている。また、先に述べた通り、吉田地区は舞鶴市内でも特に小規模の集落であり、漁業者を含めて高齢化が進んでいるが、私たち家族5人がIターンにより定着していろいろな活動に積極的に参加していることにより、地区の活性化にも貢献している。

そして、新たに「青井育成会」を結成して各種取り組みを実施することにより、地区の連携の強化、活性化につながっている。

## 6. 今後の課題や計画と問題点

経営の安定化のために、カキ養殖と大型定置網の他に年間を通じてさまざまな漁業を実施しているが、私の経営の根幹はカキ養殖である。今後、規模の拡大を含めてカキ養殖に今まで以上に注力したいと考えており、全体の収入の増加とともに、マガキ、イワガキによる収入の増加が課題となる。また、地域をカキで活性化すべく「青井育成会」を結成し、養殖ガキをキーワードとして各種取り組みを実施したが、各取り組みともまだまだ始まったばかりであり、次のシーズンはより良いものとなるように、現在、会の中で定期的に勉強会を開催して議論を重ねている。

舞鶴市にIターンして漁業の世界に飛び込んで、瞬く間に10年が経過したと感している。振り返ってみると、30歳で正組合員となるまでの5年間は、漁業で食べていくための心構えと基礎を固める時期であり、次の5年間は本格的に漁業経営を開始するにあたって、数々の偶然を含めた出会いと諸先輩の助けや指導によりさまざまなことにチャレンジした時期であった。そして、これからの10年間はそれらの経験を生かして飛躍する時期にしたいと考えている。そのためには、今後も漁業を持続的に継続できるよう努力するとともに、減少が続く漁業就業者の先達となれるよう精進していきたい。



図10 週末市の様子と加熱してもぷりぷりのマガキ